

傘寿じいさんの戯言綴

名小路谷保

目次

はじめに	6
流転	8
遠き想出	11
つらい別れ	18
過疎	22
老人問題	25
冬	29

終筆	61
脱原発	59
衰退	57
過保護	55
小さな発見	51
尊厳死	49
入院	43
釣り	39
二階の窓	35
夏	32

はじめに――

矛盾で成り立つ理不尽な世に、好き嫌いの選別も出来ず、生まれ出た人間だから、その一生もまた矛盾に満ちたものだった。

大海にありては浮きつ沈みつ、陸にありては山あり谷ありの人生道中、ひたすら泣いたり笑ったり、愛したり悲しんだり、すべったり、ころんだりして歩きつづけ、やがてそれぞれの人生終着駅に着く、プラットホームに立ち、眺めた余生の風景はなんとなく殺風景であった。

ベンチに腰をおろしタバコに火をつける、ゆらいで昇る紫煙を見つめ想い出たぐる、千差万別、悲喜こもごも絢まぜに、走馬灯の如く、くるくる廻るばかりでまとまりつかず駅を出た。

結局矛盾に翻弄されただけの長い長い旅でしかなかつたようだ。

思い直して新鮮な空気を胸いっぱい吸い苦々しい、ニコチンの残臭を吐き深く澄んだ大空を、空しく仰ぐのであった。

ふとわれにかえれば早や傘寿、目前には三途の川が静かに流れていた、後戻りするにもすでに命の貯がない万事休すだ、じたばたするも見苦しい、あきらめもまた肝心だ。

何の航跡も残せず矛盾と理不尽の世を、いたずらに傘寿まで生きてと言っただけで子や孫に、美田を残してやれず責任を感じていた。

詫の印として「傘寿じいさんの戯言綴」と題した小冊子を執筆することにした。

浅学非才の身、誤字句読点や意味不明の点多々あることと存じますが何卒お気楽に読み流し下されば幸甚の至りです。

流 転

十六才で故郷を後にして大阪へ出た。

名古屋宮町に六ヶ月、京都市賀茂、妻の実家に一年、住んだこともある。昭和二十八年、結婚して西へ流れ、福岡市長浜町に六年間定住し、長男、長女の二児を育てた。

長男小学校入学に際し、故郷に帰り、三十年間働き通して来た。

二児順調に成人、それぞれ良き伴侶を得、長男は大阪市内で、長女は豊岡市に嫁ぎ独立した。

残された初老の夫妻は、二十二年前、還暦を機に過疎の村、和歌山県